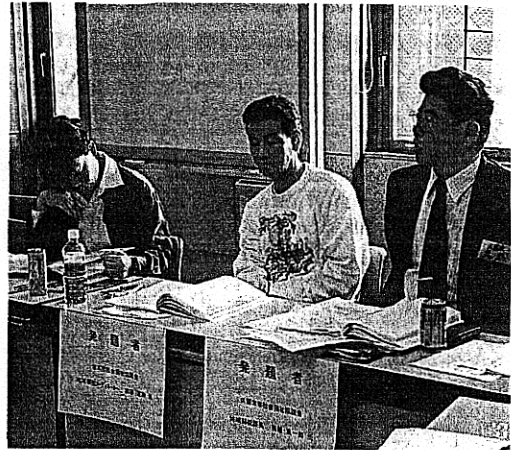
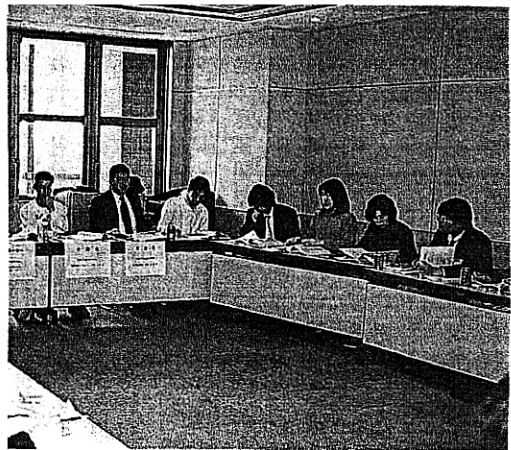


- ・「社協」という特性のある団体で住民一人ひとりに関わっていきける「社協のコミュニティワーカー」として、社協内の都合は次の問題として、まずは住民の想いをどれだけ受け止め、解決に向けて実践しているかどうか、これがキーワードとなっていく。



- ・コミュニティワーカーとして、「この人のことを何とかしないとイケない」と思うことが大切である。
- ・常に問題の入り口と解決への出口をはっきりイメージし、問題解決型に持っていかなければ問題はいつまでも解決しない。
- ・住民からどれだけの信頼を得ているか。



- ・今後の課題として、課題シートをどれだけ作成して、研究を積み重ねるか、また、応用課題だけをピックアップして、今後の検討に積み重ねるのもよい。
- ・細やかな配慮がコミュニティワーカーには必要である。自分の得意技を使いながらどのように関わっていくか。

- ・社協のコミュニティワーカーは率先して何事も実施していくべきである。一つのことを実施して、それが失敗に終わったら、自分の力量、周囲への協力依頼が足りなかったと思わず、自分のせいだと思ふこと。物事が成功した時、自分のせいだと思わず、周囲の協力があつたからだと思ふこと。

以上のようにコメントをいただき、分科会は終了いたしました。

(報告者) 福岡県社協／松永玲子



福岡県「社協職員のつどい」

**「社協の未来を切り拓く
キーワード探し」**
～キーワードは当事者・行政
・民間 委託?～

第 5 分科会



第5分科会は、社会福祉協議会の屋台骨を支えている人たちの分科会として設定し、「岐路に立つ社会福祉協議会」をこれからどういう方向に向けて舵取りしていくかをテーマに、発題者として、苅田町社会福祉協議会事務局長の福山直樹氏、また、コメントーターとして、産業医科大学教授の松田晋哉氏、兵庫県社会福祉協議会地域福祉部長の藤井博志氏を向かって協議しました。

まず、発題者の福山氏より、介護保険事業に際しての苅田町の取り組みとして、事業者として参入するか、否か、また、管理者（事務局長）として、行政を含めて、いかに一つひとつのハードル（課題）をクリアしていくか、苦汁の選択を迫られたことを経過とともに話しをされました。

二転三転する理事会、行政の裏付け
 ・ 行政のお墨付きがなければ経営できない社協基盤の脆弱さなど、理想と現実のギャップを感じながら、最終的には、「参入しない」方針が理事会において決定されました。

このような報告を踏まえ、参加者より「完全に民間事業者にまかせていいのか?」「公的なサービス機関が必要ではないか?」「市の総合福祉計画の中で、行政と社協は、車の両輪関係だから、社協に対して支援すると位置付けられている」などの意見が出された。

- コメンテーターの松田氏より、
- ① 社協としての理念の確立
 - ② マーケティングの重要性
 - ③ 情報の核にならなければならぬ
 - ④ オンブズマン機能・評価機能
 - ⑤ 住民に支持されるシステム

以上が重要であると唱えられました。また、藤井氏より、介護保険に参入するか、否かは、地域特性とか苦汁の判断であり、撤退するにしろ、参入するにしろ、サービスの質の検証をしたのか?介護保険は、明らかに保険であって福祉ではない。一番苦しい介護の部分にどう関わるかという視点が大切である、とまとめられました。

(報告者) 大牟田市社協/内田 勉

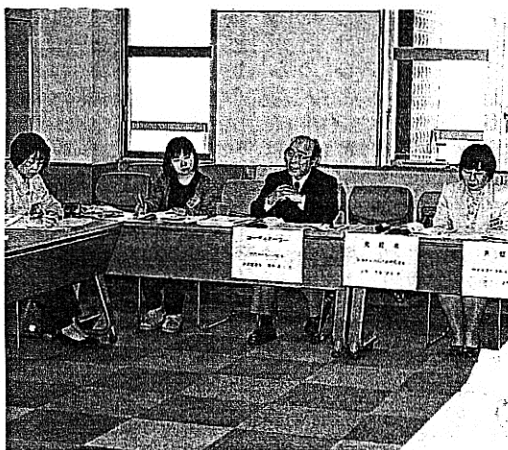
福岡県「社協職員のつどい」

「That's ネットワーク」
 ~NPO・ボランティア
 との新たな関係づくり
 を求めて~

第 6 分科会

今回のテーマにある「NPO」については、一九九八年三月国会において NPO 法案の採択を契機に、日本社会の変革が見られる。
 直接的に社協が連動することはなかったが、社協の体質をどう変えるか、社協の働きの分野を新たに開発していくかに取り組み刺激となったようだ。
 社会福祉基礎構造改革により、終戦直後の救護対策であった事業法が、豊かな今の日本社会の現状に合ったものへの内容が変化されてきている。
 ・ NPO と社協を関連させて市民社協の形成をいかにしていくか。

・ NPO 団体とボラ連の関係づくりはうまくいくのか。
 ・ 両者の意識向上に社協がサポートできるのか。
 ・ 2 人の発題者より
 ・ ボラ連に参加、加盟する団体の強化と情報交換を重点に置き、社協の手足とならない、ボラ連として自立的に考えている。
 ・ なぜ、社協から独立して NPO なのか。社協のマンパワーがなく、ノウハウに欠け、全てのことを障害者の立場に立って成しえる器がなかった。
 ・ 等々、社協に対してのシビアなご意見も：
 両者の抱えている問題点、課題点は多く、社協への期待も大きい。地域のボランティアグループと NPO 団体と社協が、常に連絡をとる体制づくりが必要である。



連携をとる上でコーディネーターを育成し、ボランティアセンターのサポート役、また、NPO のサポートセンターという立場でコーディネーターを担うことになるのではないだろうか。
 コーディネートする際の手法、情報の集め方、また、発信できるシステム等はコーディネートする機能の強化につながる。ネットは同じものでも質の違うボランティアセンターと NPO 団体との関係。将来的には NPO が地域の発信地となっていくかもしれないところで、自由発想、自由活動、そして自由さをもった社協像というのが求められていくのではないだろうか。
 社協が福祉の専門職としての資質向上を求められてきていることは、今後の課題として努力すべきところである。

(報告者) 太宰府市社協/古川 妙子



フリートーク

岐 路

杷木町社会福祉協議会

原田 且吉

突然の原稿依頼に戸惑いを感じながら受けたものの、何を書こうかなと思いい、よい機会を与えていただいたと感謝しながら、半生を振り返り書いてみようと思います。

高校卒業と同時に、国鉄に採用されたのが昭和四〇年でした。久留米駅、夜明駅、大行司駅、筑後吉井駅、博多駅、原田駅、日田駅と転勤し、輸送業務(営業)に携わってきましたが、JRへの移行前の昭和六二年二月から再び博多へ、四月の民営化と同時に旅行

事業を興すということ、私を含め各地から十数名が集められました。ここでの四年間は厳しくも、充実した日々ではなかったかと思っています。

振り返って見れば、入社以来、余暇を利用して二〇代は青年団活動に奔走し、その中で世の中の矛盾(自我)を強く感じ、社会教育の必要性を感じ、役場に入り社会教育をやりたいと真剣に悩み、役場の試験を受けようとした。奇しくも福岡県政「百周年記念」事業の一環で、第一回「青年の船」に乗船できるようになっていましたが、最終選考日と役場の試験が同じ日になってしまいました。船に乗れるのは二五歳まで、県、役場に交渉しました。でも両者とも受けて貰わねばとの返事、体は一つ、迷いに迷いました。運悪く私ともう一人、一歳下のY君も乗れるようになっていましたが、訳あって家を出し、行方不明となってしまいました。彼が乗船していれば、今の私は無かったと思っています。これが最初の「岐路」です。お陰で無形の財産(友人)をたくさんつくることができた時期だったと思います。

2 回目の「岐路」は、誰でもあることと思いますが、伴侶を決める時も考えるのではないのでしょうか。私は二十七歳で結婚をしました。自分で言うのもおこがましいのですが、素晴らしいパートナーと出会えたと思っています。妻の進めもあり、結婚を機に「ボーイスカウト」の活動を手伝っています。

現在も続けられることに喜びを感じています。

若い頃から山(登山)や川(釣り)が大好きで、子供(男の子)達と一緒に過ごす自然の中の生活は最高です。

次は、冒頭に少し触れましたように、国鉄から民営化移行時に博多旅行センター(現在はジョイロード博多支店)にどの人事課からの内示、まさに人事とはひとごと、二度断りましたが転勤せざるを得なくなりました。毎日、睡眠時間三〜四時間の生活が四年間続きましたが、新しい事業に取り組むのだという自負。上司からは、お前たちは「選ばれて来たのだから」、また、後からみえた社員には、「お前たちは進んで来たのだから」と上手に使い分けられました。しかし忙しい中、趣味と実益を兼ね、月一回、登山のツアーを計画し、北は利尻岳から南は屋久島まで、海外の台湾(玉山)、韓国へも行くことができました。また、仕事で福岡市内のF高校を担当していました。一九八八年夏、第七〇回記念大会に福岡県代表として甲子園出場が決まりました。地方予選から県大会へ、毎回の応援、そして甲子園。その夏は、球児だけでなく、私にとっても初めての甲子園でした。試合時間に合わせ様々な応援輸送体制をとり、決勝戦まで行くことができました。その間、業者間のドロドロとした醜い争いであるとか、癒着とか、フェアでない部分をいやというほど知らされましたが、要は「人は人に

ついてくる」、「物売る前に人を売れ」と自ら肌で感じ取ることができました。「企業は人なり」と言われます。新入JRの社員として生活をしている時、第四の岐路が訪れ、社会福祉協議会にとの話でした。戸惑いを感じながら、地域のためにお役に立てるならと決断をしましたものの、妻だけが反対をしました。

出向して一〇年が過ぎ、この仕事の間口の広さと言いい、奥行きと言いい、業務内容の難しさを痛感しているところです。

これからの、福祉活動(仕事)の難しさを感じているのは私だけでしょうか?今までに、様々な体験をしてまいりましたが、経験を活かし「誠心誠意」事にあたりたいと考えています。

これからも未だ「岐路」が幾つか訪れるかもしれません。ポイントを正しく切り替え、残された人生を精一杯生きていきたいと思っています。



フリートーク

**「これまでの10年、
これからの10年」**

筑後市社会福祉協議会
長野 誠

早いもので、この道に入って一〇年目の春を迎えた。

時々、いや、よく思うことがある。この一〇年間、社協コミュニティワーカーとして、何をやってきたのか、何がやれたのか、自分がいることで何が変わったのか、ということ。

自分の中で仕事に対する目的意識も持たず、また努力しようともせず、与えられた仕事を黙々とこなしていくだけなら、そんなに困難なことではない。

昨年の『福祉の職場説明会』の中で社協ワーカーを志す求職者の人たちに對して、「端的に言うと、ワーカーは、保守的な人よりも、むしろ改革的な性格の人でないと務まりません」ということを話したことがあった。

これはもちろん自分なりの考えを述べたまでで、誰しもが同じ考え方ではないと思うが、自分自身がワーカー生活の中で、常日頃から感じていることを率直に言わせてもらった。

意欲を削ぐような言い方をしてしまったと後で反省した面もあったが、そういう自分こそ、どう見ても保守的（受身）な性格の人間である。

自分のカラーが出せない、自己主張ができない、仕事ぶりを振り返り、こういうふうに自己を分析しているコミュニティワーカーは自分だけだろうか。ところでみなさんは、三月に行われた『第1回福岡県社協職員のつどい』に参加されたことと思う。

自分は第2分科会に参加したが、討議の流れから、冒頭の中山会長の基調提案の中でも触れられた、「社協不要論」が話題に上がった。

進行役の若宮町社協の鈴木さんから「社協は必要ないって声が上がっていますよ。それでいいんですか？どう思いますか？」と考えを求められたが、言葉が何も出なかった。情けなかった。

一〇年近くも社協でメシを食ってきていながら「だから社協は必要なんだ！」ということをお説けない自分が…。

ああ、何かここまで自己批判と後ろ向きな表現ばかりを並べてきて、ひとりよがりのトークになってしまっているが、一〇年の節目を迎え、ここでも一度社協ワーカーとして自分はどうあらずしてはならないかということを考えてみると、現状維持で終わってしまおう：自分の中にあるそんな思いを同じ仲間にもわかかってほしいという思いでつらづらと綴ってみた次第である。

そんな自分のエネルギー源は、ワーカーとしての自分を頼って相談を持ち掛けて来てくれる人たちの存在。

ある先輩ワーカーの言葉を思い出す。「自分を頼ってくれた人たちと一緒に考え、福祉課題を解決した時、初めてこの仕事をやってよかった！と思える瞬間を巡り合えたんだ。」

ワーカー冥利に尽きるとは、こういうことを言うのであろう。

これからの一〇年、自分も「この仕事をやってよかったあー」と思う瞬間に巡り合えるよう、気合いを入れた。



フリートーク

振 徳

芥屋 鐘人

あなたは、資格や免許の類をいくつ持っていますか？そして、それをどれくらい活用していますか？私のように人生の峠を下りはじめるくらい生きてきた人ならば、どなたもそれなりに手に入れたものがいくつもあるでしょう。私の場合、高校時代に仮病を使って早退し、初めて手にしたのは原付免許。国家資格第1号だったので、とても感動したことを今でも覚えています。

そして、それから半年後、毎日母に一〇〇円の昼メシ代をもらっては、学

食で三〇円の素うどんを食べ、空腹に耐えながら受験料を貯めて手に入れた自動二輪免許。育ち盛りの真只中にそんなことするもんで、頭に栄養が行き届きませんでした。それから、第一種普通自動車や大型一種、電話級と電信級のアマチュア無線技士。次は、左大腿部の脂肪腫切除手術で下肢障害になって間もなく、ジェットスキーに乗りたいたばかりに、屈伸もできない足の痛みをこらえ、何ともないフリをして受験した4級船舶、ツーリング好きの趣味が興じ、悪乗りしてチャレンジした国内旅行業務取扱主任者資格、職場の将来を見据えてまじめな気持ちで挑戦した第一種衛生管理者などなど。

でも、これらの免許や資格をどれくらい活用しているのかというと、悲しいかな、毎日の通勤に使う車の免許くらいですネ。好きな二輪車は、一〇年前のギックリ腰以来、万年腰痛で縁遠くなったし、ツーリング先で誰かに感動を伝えるために持って走った無線機は軽くて便利なケイタイにとって変わったし、ジェットスキーが高くて買えずに、2回目の免許更新を迎えようとしている船の免許なんぞは、パーフェクトなペーパードライバーになってしまっているし、どれもみんな役立っているつもりで取ったものなのに、今じゃカピだらけ。

モもったいないなあ。いくつか集めてお店に持っていくと、景品と交換してくれる〇〇スタンプのように、いろんな免許証類もいくつかまとまると、自分の希望する資格と交換していただけるのいいのにネ。そうしたら私は、小学校の時に途中でやめた、ちっとも面白くなかったそろばんの5級の免状やら、初めて彼女ができた時に、せめて他人が読むことができるような字が書けるようにと、ガンバったけど一回提出したきりで終わってしまった、通信教育のペン習字9級の検定証やらまで、実家に帰って押入れをあせりちらかしてでも探し出して、ほしい資格と交換してもらおうのに。

それほど本当にほしくて必要な免許や資格は簡単に取れないもんですよネ。ここ数年、何かと資格の時代へと移りつつある社協の中で、役立つものは今のところ何も持たないオジサンの大きなため息とグチでした。 おわり



あなたはどうですか？眠っていないですか？せっかくな努力して取ったのに、このまま腐らせてしまうのはド

第7回全国社協職員のつどい

参加報告

筑後市社会福祉協議会
中山 陽一

点……。とにかく他のどの研修会よりも、内容面や力の入れ方、形式に囚われないこと、何かを得たい者にか与えてくれない自由さなどが、とても自分にはぴったりとくるし、素晴らしいと思っている。

行ったことのない社協マンには、ぜひ、行って、自分の肌で、感じてきてほしいと切に思う。

今回の「第7回社協職員のつどい」は、住民主体で創ろう地域の福祉、社会福祉基礎構造改革の動きと地域福祉を推進する社協の役割と題したもので、一応、各分科会のテーマを紹介しておきたい。

第1分科会

「介護保険時代でも地域の住民福祉活動の根っこは変わらない」

第2分科会

「社協職員として当事者とどう向き合うか」

第3分科会

「社協ボランティアセンターの存在意義」

第4分科会

「社協流・地域における自己実現の支援」

第5分科会

「介護保険下における在宅福祉サービス」の事業展開

第6分科会

「低所得問題に対する社協の役割とは何か」

関西コミュニティワーカー協会主催の「全国社協職員のつどい」は、行くたびに「大切な何かを必ずもたらして帰ってくる事ができる」そんな場として実感している。

何をもらってくるか？

それは、まずは、姿をまかせよう。自分のパワーの再生と充電。そしてもう一つは、自分が社協マンであることを再確認させられる点（社協マンなら社協が抱えている問題のすべてを認識して当然といったような）。次に、いろいろな研修方法のあり方。また、社協活動の明日のための材料やアイデア。そして、今日的な福祉課題への視